

明日香をさぐる

「石舞台古墳『国史跡』

指定九〇周年」

石舞台古墳の「国史跡」指定90年の歩みについて紹介したいと思います。

石舞台古墳は明日香村大字島庄小字塚脇に所在する一辺約50メートルの方墳で、7世紀初頭に築かれた終末期古墳です。

古くから巨大な天井石が田圃に露出しており、人々の注目を集めてきました。

江戸時代の延寶年間に著された『和州舊跡考』には「細川村より四五町西なり。その近き所に石太屋とて陵あり」と記されています。さらに、宝暦元年の『古跡略考』の中には「嶋庄村 石塚 内方二間外東西四間余南北六間余 石太屋といふ陵にや。」とあり当時、石舞台古墳が石太屋（いしぶとや）と呼ばれていたことが分かります。宝暦12年には土谷川清によって

『書紀通證』が著され「島の庄村に荒墳あり、疑らくは是れ桃原墓」と記されており、島庄の荒墓が蘇我馬子の桃原墓の可能性が指摘されています。明和9年には本居宣長の『菅笠日記』の中に「嶋の庄といふ所には。推古天皇の御陵とて。つかのうへに岩屋あり。これも同じ方に。坂田村と申すには。用明天皇ををさめ奉りし所。みやこ塚といひて。」とあり、石舞台古墳は推古陵で、都塚古墳が用明陵ではないかと記されています。さらに文政12年、津川長道の『卯花日記』の中で「大和志にも荒墓と云り。若くハ馬子大臣をおさめたる桃原の墓にてハ不レ有哉、推古天皇三十四年馬子大臣薨仍葬二

干桃原一墓と書紀にしろされたり。」と石舞台古墳の被葬者について蘇我馬子ではないかと記されています。嘉永元年、暁鐘成の『西国三十三所名所図会』に「島莊村の道の傍田圃の中にあり。大石を以て積みかさねしものなり。伝へて云ふ、天武天皇を仮りに奉りし古趾なりとぞ。」とあり、天武天皇の殯宮ではないかと記されています。

明治時代に入ると野淵龍潜の『大和國古墳墓取調書』に「高市村大字島ノ庄字塚ノ脇ニ在リ 村人ハ本墳ヲ指シテ石ノ舞臺ト呼ブ塚ハ巨石数多ヲ累疊シ内ハ空洞トナリテ」と記されている。明治45年には喜田貞吉の「蘇我馬子桃原墓の推定―稀有の大石塚、島の庄の石舞臺の研究」で「種々の事情を綜合して、而して之に對して此の墓が斯く日本に一二を争ふ程の巨大なるものなりとの事實は桃原墓と此の石舞臺とを接近せしむるに十分有力なる證據となる」と述べられており、石舞台古墳が桃原墓で被葬者が蘇我馬子であるという学説が定着していきます。

昭和8年・10年には京都大学考古学研究室による本格的な調査が実施され、調査の結果、一辺約50メートルの二段築成の方墳または

上円下方墳で、埋葬施設は巨石を用いた南に開口する大型の横穴式石室であることが明らかとなりました。当時としては画期的なトロッコを使って石室の中から土砂の搬出が行われました。石室内から土師器、須恵器、鉄鏃、金銅製帯金具、金銅製尾錠、金銅製菊座金具、凝灰岩等が出土しています。そしてこれらの成果を受けて昭和10年12月24日には国史跡に、昭和27年3月29日には特別史跡に指定されました。

昭和12〜37年にかけて保存整備事業が断続的に実施され、現在に至っています。

（明日香村教育委員会文化財課）

